

復旦大学セメスター留学便り 11月 (引率教員版)

三ヶ月の留学期間が終わりました。最終月の様子をお伝えします。

11月20日(木)・21日(金) 期末試験

今年は最終週まで文化講座がありましたが、例年に比べてきついスケジュールの中でも、頑張っていたようです。前の週にはHSKの補講が終了しました。

21日(金) 修了式

全員に修了証と記念品が手渡されました。その後、発表会がありました。発表会が行われることが決まったのが数日前でしたので、できることは限られましたが、それでも文化講座の成果等、受講者以外にはわからなかった内容も公開され、互いに感心していたようです。

25日(火) 帰国

羽田空港で解散となりました。これから長い休暇に入ります。時間を持て余すことなく、今しかできない経験を積んで欲しいと思います。この後、個人で別の土地に留学に行く学生もいます。

【学修面】

授業担当の先生が交通事故で足を骨折し、担当者が代わるという事がありました。新しい担当教員もよい方で、皆すぐに馴染んだようです。

最終月に入り、全ての授業を見学する機会がありました。どの授業も工夫されており、学生もしっかり声を出していましたが、後から「ふだんとは違った」という告白も聞きました。

【生活面】

学生主催の、中国人学生と交流会を兼ねた卓球大会が行われました。限られた時間の中で、班長が中心となって計画、実行されました。普段は勉強に追われる生活なので、楽しい息抜きになったようです。

【三ヶ月を振り返って】

例年より空きコマのない時間割でしたが、誰も脱落することなく、最後まで勉強を続けることができました。日本ではこれだけ集中して中国語を勉強する機会はないので、この経験が学生の今後に活かされることを願います。

中国語の学力については、個人差はあるものの、リスニングを中心に伸びたように見受けられます。始業式では教員の口にする中国語が全然聞き取れなかった学生も、修了式では中国語の冗談にも笑えるようになっていました。表情からも自信が窺えます。

また、國學院の学生でクラスを作り、毎日皆で授業を受け、同じ宿舎で生活するという環境のため、人間関係も自然と深いものになります。その中で、皆様々なことを経験したり、考えたりしたようです。

三ヶ月の留学経験が、学生一人一人に何を与えたのか。それが今後よい形で学生たちの言動に表れることを期待しています。

(引率者 佐川記)